

ボードリヤールと生権力論

石川 洋行

研究室紀要 第41号 別刷

東京大学大学院教育学研究科 基礎教育学研究室

2015年7月

ボードリヤールと生権力論

石川 洋行

1 はじめに

1-1. 本稿の位置と課題

すでに生権力ないし生政治という用語が、学術的議論においてその基礎的な共通理解を獲得するようになって久しい。もっとも論者によってその概念定義は多様であり、またその呼称の起源からして必ずしも積極的にそう呼ばれていたわけではなく、むしろこの問題提起が後の研究の展開に伴い、多様な含蓄を付帯して後付け的に総称されていった性質をもつものである。とはいえ、現時点において生権力と言え、既に周知の事実となった1970年代半ば以後のM・フーコーの議論をその基底とすることは間違いなく、本人がその厳密な定義を明示していないにも拘らず(またそうだからこそ)、生権力という概念装置は、それ自身への批判的言説も含めた、多大な影響力を持ち続けている。しかし、その一方でフーコーの権力論に比して、J・ボードリヤールがフーコーと同時期に、生権力と明示しないまでもそれと問題系を一にする論題、すなわち「生きさせること」に照準する新たな権力の戦略的形態について語っていた事実は顧みられることがない。初期ボードリヤールの論調を視る限り、生死に関わる権力の位相の変化は、その重要な帰結であったのにも関わらず、である。『象徴交換と死』が公刊された1976年は、フーコーがその講義において生権力という概念に言及し、積極的に議論を展開する時期と重なりあうものであり、本著の主題は『狂気の歴史』に端を発する初期～中期フーコーの問題系を強く共有するものであると看做して差し支えないものである。

本稿は、ボードリヤール、とりわけ『象徴交換と死』における権力の問題を、フーコーとの対比を明らかにしつつ、その思想史的位置を標定することを重要な課題とすると同時に、その理論的妥当性を問い、〈主体〉を超えたところにある現代的な権力の位置とその存立条件を明らかにすることを試みるものである。それは、近代的〈主体〉の所在とその形成

を(肯定的であれ、批判的であれ)理論の基礎的な準拠項としてきた教育理論に対し、根本的な反省を要請するものでもある。

1-2. 主体とその彼岸

周知のとおり、フーコーにおける生権力は、①個人の身体性、②集団の人口性という二点をその重要な媒介項としている¹⁾。近代的権力の装置は、一方で可塑的な個人の身体へと介入し、規律訓練によって内面をそこへ自ら配慮するよう仕向けることで(解剖-政治学)、また他方で公衆衛生の向上や人口統計学的技術により、その成員を統御・調整可能な範疇におさめることで(生-政治学)、独特な〈主体〉の位格を塑形していくというのである。この「主体の産出」を行なう装置としてパノプティコンや、司牧者に統括された告白の技法があり、『監獄の誕生』から『性の歴史』へ至る理論的転回は、ある一貫した問題系のもとに結び付けられることができる。

ゆえに、ここで言われる〈主体〉とは権力の作用因にとどまらず、まさにその成果としてある。近代的権力が〈主体〉を産出するその理由に関しては、さしあたり、超越的規範を個人の経験可能な現実へと内面化するために、規範に対する偏差としての〈主体〉の位置が標定され、その差異が自覚される必要であるという理由に拠ると言うことができる²⁾。むしろフーコーは、この主体の本質論を展開しようと試みたわけではなく、あくまで外在的でnegativeな視点からその形象の布置を明らかにしようとする、〈外〉の思考による縁取りを試みていた。というのも、(真の)主体という言葉の所在は、「～ではない」という否定神学的な言及をし尽くした残余においてこそ求められるものだからである。

しかし、他方でフーコーは生権力に対する「抵抗」の可能性も語っている。彼は、その抵抗の位相を医療や教育的技術の介入そのものの「拒否」という可能性において考察していたのである³⁾。それは具体的にはたとえば延命に対する自死の権利として

理解されよう。しかしながらこの議論は、すぐに疑いようように、主体を拒否するという〈主体〉を無自覚に想定するばかりか、異常者として廃棄されることを積極的に受け入れ、消極的に権力のシステムを肯定している可能性がある。ここにおいて、主体を受け容れることも拒否することも、汲みつくし難い透明な権力の網の中に捉われることになる。少なくともこの点に関して、フーコーの議論は錯綜しており、内田隆三の比喩を用いれば、その主体は奇妙な「回転ドア」⁴⁾に誘われているのだが、そのことがまさに、現代における主体や権力の問題を論じることの途方もない困難を示している。

フーコーは生権力の準拠項として、一貫して独特なく〈主体〉に着目する⁵⁾。彼がこれを言説の網の中に見出し処理する技量は見事であるにしても、しかしながら、その理論は〈主体〉を中心とした権力の在り方に固執し、その共犯性を脱していない点で、現在から見れば萌芽的な理論的推察に留まっていると言わざるを得ない。そして、より重要なのは、現代における権力の問題系が、すでに〈主体〉を基礎とする権力とは全く別の位相へと転位してしまったとすれば、どうであろうか。むしろ、この点については『言葉と物』において既に留保されていたことではあるし、フーコーは歴史的な言説の分析に照準することでその批判を回避してはいるが、そうであるがゆえに、彼の示した権力観を現代的な社会的事実即ちに即した形で、精緻かつ大胆に発展させていくという重要な課題が、われわれに残されている。

本稿はこれから、フーコーと同時期に提示された「もう一つの」生権力論の素描と、その社会理論的課題を明らかにするだろう。その背後に見え隠れするのは、現代における主体の途方もない困難と同時に、生権力的問題設定が否応になく抉出し浮上させる、権力のネガとしての「死者」の存在であり、われわれはその点においてこそ、フーコーの問題系から出発しつつ、まさにその彼岸へといざなわれるのである。

2 生権力とその外部

2-1. 対象の指定——消費社会における超越性の不在

ボードリヤールにおける記号論的社会学の試みは、消費社会における(1)目的性の不在、(2)システ

ムの記号論的構造化、という2つの論理を引き受け、対象化する形で展開されたものである⁶⁾。より正確にいえば、社会の外部に存在し、その合目的性を保証する抽象的な超越性の不在が、中心を失ったシステムの自己準拠的な増殖と過剰をもたらし、(1)から(2)へと移行するような形で、社会のシステム論的総合化が図られると言えらる。この図式のなかに、先験的な主体が侵入する間隙はない⁷⁾。あるとすれば、消費社会の全域的なシステム、すなわちモードの論理にその都度適応することで生まれる、模像(シミュラクル)としての主体である。

ここでいう主体の不在の問題は、高度にシステム化された社会において生活世界の経験が剥奪され、〈生〉が宙吊りにされることに対する批判的言説へと容易に結びつく。しかし、ここでも(フーコーと同様に)再び問題にされるのは、疎外されるべき「真」の主体や生などが果たして存在するののかという点である。情報や記号の氾濫は、むしろモノや現実が付与される真なる刻印を解除し、相対的な空箱にすぎないという「真実」こそを暴露してしまう。この事実は、ボードリヤールがその理論の彫琢において、ガルブレイスの依存効果論やブーアスティンの擬似イベント論といった理論を修正した思想史的成果としてもある。総じて、フーコーの段階においては未だ中立なものとして留保されていた〈主体〉の存在は、ボードリヤールにおいてはその不在が強調され、〈主体〉の領域を死守しようとする実存的意思は皮肉にも笑い返されてしまうだろう。

このことは死についても同様である。システムの合理性は、死の持ちうる超越性、社会のなかで死を価値付けている倫理や象徴の問題を無効化し、われわれから死を(あるいは死へと)排除していくというのである⁸⁾。すなわち、既に有名な定式となった「生かせて、死へと廃棄する」の、より後者の部分である。具体的に、ボードリヤールがこの〈生権力〉、あるいは〈死権力〉と呼ぶべき論題に言及するのは、初期の理論的集大成といえる著作『象徴交換と死』の第5部「経済学と死」に集約されているため、本箇所を解題しつつ、その論旨に肉薄することが本稿における基礎的な作業として求められる⁹⁾。

2-2. 『象徴交換と死』における生権力論の展開

フーコーの生権力論では、主体や死の問題が留保つきで比較的中立的に取り扱われていた一方、ボー

ボードリヤールのそれにおいては、未開社会の儀礼や供犠を引き合いに出しながらそれらのより多様なあり方が論じられる、挑戦的な（悪く言えば拡散した）試みがなされている。『消費社会と神話の構造』が比較的大衆向けられた現代社会論的体裁をもつものであったのに対し、『象徴交換と死』ではその成果を受け、未開社会から『エル』誌のモードまでを網羅する、広汎な事例を交えた、社会の大胆な理論化を試みている。ここで読者はホットな未開社会の印象とクールな現代社会との両者が、時空を超えた奇妙な出会いを見せるさまを目の当たりにするだろう。これは一見、学術的な体裁を放棄し、各々の社会評論を集約したアマalgamにも見える。しかし、この混淆性は、未開と現代、さらには象徴とそれを欠いたまま氾濫する記号¹⁰⁾が同一平面に並存する現代消費社会の皮相的描写にとどまらず、まさにそうであることによって、近代的な範疇にある生産の論理を、未開社会にまで遡及して相対化することをその重要な目的とすることによるものである¹¹⁾。

近代のシステムが生産の論理に即して稼動されているのだとすると、個人の生命／身体がもはや生殖や価値増殖を行うことが出来ず、また場合によっては他人の生産性を阻害するようにみえる場合、その生命／身体は無用の廃物とみなされることになる。これは基本的に、〈主体〉の産出をその中心命題とするフーコーの生権力論においても同様に暗示されていた側面ではある¹²⁾。このことを、ボードリヤールは合理的技術論によって言語的領域が剝奪された、死ぬことすらできない廃物と化した宙ぶらりんの亜人間として描いていた。

いずれにせよ、司祭が死骸を餌にするハゲタカにすぎなかったとすれば、今日ではこの機能は広く医学にとって変られている。医学は技術的な世話と気遣いで彼らを打ちのめしながら、彼らの語り〔parole〕を閉め出す。幼児のように言葉を持たない死、もごもごと不明瞭で監視の目に晒された死。血清や実験室でのその治癒は、語り言葉の禁止のアリバイでしかない¹³⁾。

ボードリヤールはシステムの合理性の外部に死を位置づけるが、それは彼の思想における〈象徴的なもの〉の問題と表裏一体をなすものである。ボードリヤールにおける象徴とは、単に社会の外部にあり、

それを統括する抽象的な普遍物であるにとどまらない。そうであることによってわれわれの決して手の届きえない、賭のような不確定性を保証する存在である¹⁴⁾。この思想的源泉は、バタイユのいう至高性としての悪、あるいは「呪われた部分 la part maudite」の概念に求められる¹⁵⁾。バタイユによれば、われわれは他者との解消できない差異を宿命付けられた非連続的な存在であり、そうであるからこそ、「死を賭すまでの生の称揚」としてのエロティシズムによって、連続性に対するロマン主義的な欲望が喚起されるのだが、これはわれわれの高度に分節化された社会のネガの側面をなすものである。ゆえに、バタイユ＝ボードリヤールの思想においては、生と死を別個に論ずることは誤りであり、むしろ生が死へと反転する交換可能性にこそ、その思想的本質がみいだされるとみるべきである。

しかしながら、さきに見た〈亜人間〉を生み出す生権力は、むしろわれわれから死を剝奪し、死んだまま生かされ続けるミイラのような屍体の側へと、それがもたらす死の位相を変化させている。近代社会においては、すでに社会制度としての象徴交換は存在しないとボードリヤールは言う¹⁶⁾。そこでは、生死の可逆的な循環運動が停止され、生のみならず死が宙吊りにされることこそが問題にされているのである。ボードリヤールは、フーコーの、言説に対する厳しい中立的態度や「異常者」へのまなざしに根ざされる社会誌の試みを評価しつつ、以下のように定義する¹⁷⁾。

けれども、他のあらゆる排除に先立ち、狂人・子供・劣等人種の排除よりもより根源的な排除がある。それら全ての排除に先行し、その排除のモデルになり、西欧文化の「合理性」の土台にある排除。それは死者と死の排除である¹⁸⁾。

ボードリヤールは象徴的なものの可逆性の本質として死を位置づけ、近代社会においてこの領域が排除と隠蔽の危機にあることを示唆するのである。これは、一見するとG・ゴラーの言うような現代社会における「死のタブー化」¹⁹⁾を説明しているようにも見える。しかし、事態はそれほど単純ではない。既に、E・モランやP・アリエスによって、「依然饒舌な書物の中の死と、恥じ入りおしだまった現実の死とのずれ」が指摘されており²⁰⁾、そのタブー化にも関

らず哲学や文学は死について語り続けてきたからである。現代社会は死を饒舌に語りながらも、他方でそれを巧妙に排除するという錯綜した言説の中にある。

この背反的接着をどのように説明できるだろうか。ボードリヤールは象徴的なものの本質を「可逆性」、すなわち、ある現実が別の他者へと反転と循環を繰り返す論理こそに求めていた。象徴交換という語は単に物々交換や贈与といった事例を超えて、そこで人々が〈象徴的なもの〉とたわむれる、特殊な磁場の存在を示唆するものである。象徴的なものの本質は儀礼から神、法、言語、そして社会の所在まで多様な規定がなされるが、システムからしてみれば余計な冗長性や過剰性を孕むものである。われわれはそれらを特権化し、別様の仕方を取り扱うための記号の変換作用を持ち得ているのであり、そこでは日常と祝祭、平常と異常、生と死が反転しては交替するある種の自己浄化が働いているとみてよい。この論理においてわれわれは、死ないし死者ともある特殊な関係によって結ばれているといえる。

このような死者との関係が失われるのが、近代社会の根本的課題である。生権力が〈生きさせる〉ことへの合理性に根ざされているとすれば、権力はわれわれから死を引き剥がし、露骨なまでに不可視化してしまう。確かに「死のポルノグラフィ」ないし「死のガイドライン」として、われわれは死に関する（しばしばコマーシャルな）過剰な照合系を与えられるのだが、それは不確実性としての死を飼いならし、その不在を隠蔽するための擬似餌にすぎない²¹⁾。幽霊のような死者の存在に対しわれわれが関係を結ぶ道は巧妙に回避されている。ここに、(現実的な)生と死を明確に剥離するつよい機制が働いているとみるべきである。ボードリヤールにおける生権力論への接近は、さしあたり、このような象徴性としての死の剥奪という文脈において理解できであろう。

2-3. 〈生権力〉の外部——象徴性と贈与

ではもう一点、生権力論における重要なもう一つの側面、「権力」の側はどうだろうか。ボードリヤールにとっては、死と同様に権力も、明確に可視化された、社会の中心をなす重要な象徴点として描かれるべきものであった。

われわれの政治的権力全体が、いまでは権力の機能の幻影でしかない。というのは本来、権力は、他者、敵、野心、脅迫、すなわち悪を指示する、象徴的な力によって存在するものなのである²²⁾。

ボードリヤールはシステムがその政治的中心=象徴を失ったことを強調するが、それはつまるところ、社会の外部に存在し、その同一性の中心となる、至高性としての「象徴的権力」が失われたことこそを意味する。この論述は、見ようによってはバタイユと人類学の影響を多分に受けたロマン主義にもみえる。しかし、ここで言及される集合的無意識としての〈力への意志〉は、システムによる「脱魔術化」のみでは拭い去れない、社会的事実に対する重大な影響を依然として持ち続けている可能性がある。彼は別の講演で、

権力なき社会のメランコリー、このメランコリーが、かつてファシズムを出現させました。ファシズムとは、喪の作業をなしとげるすべを知らない社会に、照合系を過量に投下することでした。我々の現状は常にこのようなものであり、我々は現実や権力、そしてそれらと同じ様に衰退を余儀なくされている社会性 (le social)、それらに対するの作業を行うすべを知りません。それどころか、我々は権力、現実、社会性を人為的に再びもり返すことで、現状から逃れようとするのです²³⁾。

と述べていた。ボードリヤールは、システムのもたらす象徴的権力の決定的な不在が、致命的な自殺をもたらすとみる。網の目になった権力の分析は確かに必要だが、この視点は無を存在とみなすような、ある種の一人相撲に陥っていく可能性を拭いきれない。むしろ、権力を去勢された社会は、たとえばバタイユが連続性に向かうエロスの奢侈の極点として戦争をとらえていたように、どこかでその盛り返しを凶ろうとする可能性がある。フーコーの権力分析に比して、ボードリヤールの問いはあくまで、社会を超越的に規定するその象徴的中心はどこへいったのかという点に根ざしている²⁴⁾。

むろん、ここでいう悪とは、われわれを禁忌と侵犯の運動へ誘う両義性を有し、そこを通してわれわれ

れを社会の界面の裏側へ導いていく、消失点のような何かである。悪の象徴性は、そこに触れると何が返ってくるのか分からない、気まぐれな領界であり、掴もうとするほどに逃げ去ってしまう。ボードリヤールの議論における〈象徴的なもの〉は決して自身を覗き見ることのできない空箱としてある²⁵⁾。しかし、それはたとえばエディプス・コンプレックスにおいて超越性に固定された空白の父などではなく、むしろその膨張や収縮、延長と消滅を繰り返し、積極的にわれわれに交換行為を働きかけるものである²⁶⁾。

この可逆性が具体的にあらわれた社会的事実として、贈与の原理がある。それは贈与-返礼を繰り返す社会的関係のゲームであり、等価交換ではなく、むしろ、返礼として何が送り返されるか分からない、おもちゃ箱のようなそれである。これは、他者との関係を通して、あらゆるモノを一般的等価物へ還元することなく、別様のものへとコンバートする社会的機能としてみることができ。巷間、「純粹贈与」に関する安易な言及や、贈与を社会関連資本として固定化して看做す議論が一般化しているが、むしろ贈与の本質は、その義務として返礼を要求し、しかもその返礼として何が出てくるかわからない根源的な予測不可能性に基づいている。それは気前の良い贈与が逆に強い反撥を生む場合や、見返りなき自発的な逆選択さえ含まれる。この点についてボードリヤールは、『象徴交換と死』の註の一節において、

贈与は権力の源泉であるし、その本質ですらある。ただ対抗贈与のみが権力を破棄する。これこそが象徴交換の可逆性なのだ。

とまで述べていた²⁷⁾。正確に言うなら、既存の権力関係を反復し強化するように、贈与の形式と関係性に乗じる形で、われわれの内側から具体的な権力が行使されるのだと言えよう。ボードリヤールの議論と贈与論との結びつきに関してここで詳しく論じることにはできないが、われわれが権力との関係において置かれている動かしえない可逆性をその理論の基礎としていることは確かである。

以上、象徴的権力と贈与というボードリヤールにおける二つの権力の形態をみてきたが、これは当然ながらフーコーの描く生権力の形態とは対照的な、一見「古めかしい」権力の形態に見え、時に〈生権

力〉の範疇を逸脱しその外部に位置しうるものである。しかしながら、この二つの論理は、生権力論がその重要な基礎としている「権力の拡散と浸潤」という問題をその始点としつつ、近代的変数の及ばない権力の原理に照準することで、むしろ〈生権力〉の裏側から、その現代的様相を素描せんとする点でフーコーに極めて接近している。ボードリヤールの描く権力の様相は、フーコーとはまた別の意味で拡散をみせている（フーコーの場合、監獄や病院といった具体的対象を取扱うため、まだ分かりやすいといえる²⁸⁾）が、それがフーコーにおける主体の生産とは全く異なる形で、現代消費社会における「権力」の容貌を明らかにすることをその重要な課題としていることは確かである²⁹⁾。

2-4. フーコーを超えて

ボードリヤールの生権力論は、システムによる死の不可視化や医学・教育的な介入を強く問題化する点でフーコーのそれに強く接近するものであり、中世キリスト教とシステムとの共犯性にその具体的源泉を見ている点などからもその類似性は見逃せない³⁰⁾。一方で、その権力の透明性は、既にフーコーの用いた方法で捕捉しうる範疇を超え出ずるものである点で、そこから離反するものでもある。

ボードリヤールがフーコーを批判するのは、まずその権力論が未だに近代的な〈主体〉の生産の範疇にあり、その主体との共犯性を拭いきれない点もさることながら、権力の実在性を疑わない点で、その分析で導出された権力の拡散という結果を発展させる余地を残したままにしている点にある³¹⁾。迂回になるが、ここで再度、ボードリヤールとフーコーの権力論との対比を確認しておこう。

フーコーはしばしば権力の過剰、またその病的な徴候を論じる³²⁾。これはファシズムやスターリニズムの自発的な出現という、批判理論とも通底する思想的衝撃を共有するものであるにしても、この主張は誤解を生みやすく、かついくつもの疑問を生じさせる。一つには、そもそも過剰でない権力など存在するのだろうかという点にある。「過剰な」権力を判定することは権力の側の自己規定に外ならない。二つは、確かに人口学や公衆衛生が現代的権力の一形態であるとしても、これらは果たして成功し、われわれを「管理」するに至っているのだろうかという点。人口管理や都市計画の失敗は言うに及ばず、過

剩に行使される統治技術はむしろ、その技術論と結びついたガジェットや重人間を生み出すとともに、管理に対する反撥を産み、失敗に終わる可能性が高い。ダミアンの処刑が実は象徴的な身体の断裂とは掛け離れた段取りの悪さと焦燥の下で行われたように³³⁾、われわれは「権力の失敗」にこそ、目を向ける必要がある。そして最後は、まさにそうであるがゆえに、「網の目」の権力は、象徴的権力の不在、あるいはその乗り越えによってこそ新たに出現した問題系であり、むしろ権力の所在を保証する現実性からすでに離陸した状態を指している可能性がある。源泉が不可視化され、日常の細部へと浸透し、網の目状に張られた権力、それはもはや、権力と呼ぶべきかどうか分からない何ものである。

すでにパノプティコンの時点において、権力の内実が空箱である事実は示唆されていた。この例示は監視人があたかも普遍的に存在するかのようみせる装置であった点において、近代的権力の最後の栄華であったといえる。これに対し、ボードリヤールは「テキストの限界においてことばが意味を失うのは、悪いことではないし、やりすぎともいえない。フォーコーは、性とその真実の原則については、意味を失わせているが、権力については、そういうことはしていない。」と指摘する³⁴⁾。この権力のシミュレーション的状况は、すでに見る者／見られる者という実在による遠近法に基づくことのない、自他の関係性の崩れた、過剰なエネルギーのカオス状態に突入している可能性を示唆している。

もはや工場が存在しないとすれば、それは労働が至るところにあるからである。もはや監獄が存在しないとすれば、幽閉と監禁が社会的な時空間の至るところにあるからである。もはや収容所がもう存在しないというのは、心理学的で治療学的な管理が一般化し、日常のことになったからである。もはや学校が存在しないというのは、社会的過程のあらゆる神経線維に規律と教育的形成が浸透しているからである³⁵⁾。

この、彼がトランスポリティックと呼ぶ価値の越境的拡散状態は、まさにわれわれの主体や身体を越境し、その内側から作動する力の媒介項であるが、そこに権力という語は使われることなく、消費のシステムという言葉で言い換えられる³⁶⁾。この記述は

力のエネルギーというよりもむしろ、横溢し、氾濫するその砂をかむような無意味さ、空虚な記号が散乱する猥雑性 (obscénité) を強く意識させる。権力の漠然とした気配はあるが、その源泉がどこにあるのか、誰にも分からない。国家や警察といった装置は依然として存在するが、それは既にその媒介項と目的を失った、自己正当化を続ける空虚な統治システムでしかない。この問題は、「教育」的な言説があらゆる領域に過剰に浸透し、もはや制度を超えた隙き間ない管理社会を形成していく現代的な知や教育における価値の形骸的拡散にもいえることである。

けだし、権力を過剰であるとみるか不在であるかとみるか、このフォーコー／ボードリヤールの対比は、「網の目」としての権力定義か、悪＝至高性としての象徴的権力を保持するののかという、その始点とする概念定義の相違にすぎず、それぞれ批判的な概念装置として援用可能なものである。にもかかわらず、両者は現代社会における権力の変質をその課題としている点において、同位相にある。問題は、ここでいう権力の過剰、ないし不在といった問題が、われわれの社会にとって何を意味しているのかという点であろう。そして、より本稿の目的に即して言えば、その理論的彫琢の背景にある、現代社会における権力の諸相を、ボードリヤールが具体的にどのようにとらえていたのかという点にある。

3. 現代社会におけるシステムと死

3-1. 経済学と死

現代社会をめぐる死の諸相は多様であり、さまざまな社会の形態に応じた多くの事例に満ちている。それらが社会全体における論理として一般化される必要にあるとき、一義的に定式化された経済学の言語やシステム論的視座を要求することになる。ボードリヤールの論述も、資本を一般的等価物とする体系とみなす、一種のシステム論の範疇においてこの特徴を把握しようとする³⁷⁾。この具体的理論化が図られるのが、『象徴交換と死』第5部第3章にあたる、「経済学と死」と題されたテキストである。ボードリヤールはここでもやはり、あらゆる生の剝奪と死への廃棄という生権力的問題系を彫琢し、そこで使い捨てられた廃物＝記号としての死の蓄積をつよく問題化している。では具体的にここでいう、経済的なシステムと生権力の関係はどのように描かれるの

だろうか。

ボードリヤールにおいて、一般経済学、すなわち資本の蓄積は、それそのものが「死の蓄積」であるという。むろんこれは、一般的等価物へと変換されることで、経験や記憶を備えたモノの厚みが疎外される合理化論的構図をその基礎としている。では、この論理と死の問題はいかにして接続されうるのだろうか。大澤真幸が指摘したように、近代資本制の発展は、等価交換を実現する貨幣の価値性を保証する超越者の存在を始点とするとともに、現在の時点から将来的な価値を予測しうるため、未来からみた現在、すなわち「過ぎ去ってしまった時間」を先験的に繰り込み続けることによってこそ実現可能となるものであった³⁸⁾。すなわち、資本制と時間の不可逆性は、後者を前提とすることによってこそ可能になる表裏一体性をなすものである。

この問題が生死の問題と結びつくのは、不可逆的な連続性を帯びた時間の想定がある無限性、すなわち不死を想定せざるを得ない点においてである³⁹⁾。この不死の想定により、死はシステムの合理性にとってある禁忌をなすとともに、死と生は一つながりの平面上に配置されるくんだりとなるが⁴⁰⁾、ここに生と死のあいだを往来する象徴交換はその機能的役割を決定的に失うこととなる。しかし、それは裏を返せば、死をシステムに回収しようとする徒労のような努力の過程があり、それによってかえって生死の境界が曖昧になり、あらゆる生が消尽不可能な屍体になることを意味している。資本は価値の蓄積と増殖を至上命題とする。しかし、それは価値が自らを「使いきる」ことのできない不気味な過剰性を帯びることと裏腹である。増殖や蓄積を至上の目的とする生の論理と、破壊的な消滅を伴う死の論理は、本来、本質的な通約不可能性を把持していたはずである。この矛盾を解消するため、システムは死を巧妙に排除しようとするのだが、おそらく、この文脈において真の意味での「死のタブー化」が説明されうるであろう。

総じてボードリヤールにおける経済学の位置とは、その前提として時間の不可逆的な普遍性を要求することで、システムにおける「価値のもつ線的で終わりのない終局への死の延期という幻影」⁴¹⁾をもたらすものであり、死をその外部へ無限に繰り越すことで、根本的な蕩尽の不可能性と引き換えに価値の蓄積を獲得しようとする。そこでは、生と死は明

確に隔離され、前者から後者が触れられることのないように仕組まれてはいるが、それは権力が想定し介入するメタ的な位相（＝線的な時間）としては同一平面上にある。「われわれのあらゆる文化は、ただ価値としての生や一般的等価物としての時間の再生産のためにのみ、生を死から切り離し、死の両義性を悪魔祓いする途方もない努力にすぎない」⁴²⁾のである。

結果として、主体やモノの厚みは権力と資本の全面的な介入によって漂白され、一般的等価物ととなり成長と廃棄のシステムへと組みかえられることになる。そこでは、あらゆる主体やモノが自足的意味を欠いた恣意的な記号として使い捨てられ、「死がとりつくように」蓄積していく⁴³⁾。このような問題設定が、ボードリヤールにおける明確な反経済学の意図をもたされた「死の経済学」であるといえるが、この経過は、次のような一節に集約されていよう。

もはや人格の永遠性を信用しない人々でさえ、あたかも複利資本のように時間の無限を信ずる。これこそが時間の無限のなかに伝導する資本の無限であり、もはや交換／贈与の可逆性を知らず、ただ量的成長の不可逆性しか知らない永遠的な生産体系である。科学の蓄積が真理の観念を起こさせるように、時間の蓄積は進歩の観念を起こさせる。どちらの場合も、蓄積物はもはや象徴的に交換されることはなく、客観的対象物の次元となる。極限的には、時間の全面的客観性は、全面的蓄積と同じく、象徴的に交換することの全面的な不可能性であり、それこそが死である。そこに経済学の完全なる袋小路がある。経済学は蓄積によって死を廃すことを志向するが、蓄積した時間自体が死の時間である⁴⁴⁾。

システムはあらゆるモノや記号を一般的等価物とし、すべてを屍体へと還元する。では、ここで不可蝕となった〈死〉はどのような技術論のもとに、権力に回収されていくのだろうか。この問題に関して十分に回答することは本稿の紙幅を超えるが、少なくとも、ボードリヤールはここで(1)死の個人主義化、(2)集団における死の管理の二点を指摘している。ここで読者は、これらがまさにフォーコーの論じた生に関する統治技術論を、死の側へと反転させた

ものであることに気付かされる。われわれは、以上の理論における「死 la mort」と「死者 un mort(e) / les mort(e)s」の微妙な差異に配慮すべきである。死は記号と化して堆積し続ける。しかし、死者の側は、その不在がかえってわれわれを強迫的に刺激するかのよう、不気味な笑いを浮かべてこちらを向いているように見える。

3-2. 死者たちのたわむれ

現代において、象徴性としての死はどこへ行ってしまったのだろうか。たしかに不確実性として死は依然として存在しており、それは各々に個人主義化されたりリスクという形でむしろその領域を拡大しているときえいよう。しかし、それは合理主義的なシステムからしてみれば、アノマリーな現象でしかない。過剰なシステムを抱えた社会においては、「本当のところ、人々は死をどう扱えばよいか分からないのだ。というのも、今日では死者であることは正常なことではないからである」⁴⁵⁾。われわれは、死と交換的にたわむれ、接触する道から巧みに疎外されており、現代の都市空間には死者がうごめいている⁴⁶⁾。

ボードリヤールは一貫して死について語る。主体の終焉から未開社会における死、そして9.11テロリズムまで、彼が多様な主題を扱った思想家であることを考えればその一貫性は際立つものがある。しかしながら、そのなかでもとくに重要なのが、「概念の死」、すなわち意味を失い廃棄された記号の死である。すでに『消費社会の神話と構造』において過剰な生産は、モノの消費ではなくその「破壊」を要求すると述べていたとおり⁴⁷⁾、あらゆる記号が過剰に生産されては棄てられてゆく、資源の「廃棄」の問題こそが、消費社会の根本問題として考えられねばならない。もちろん、概念の記号的使用と廃棄は、知識人の強い反撥を生起する。しかし批判的言説などお構いなしに、消費の言語は新たな流行の体系を産出し、その都度記号の社会的配置を組み替え続ける。そこに、アカデミズムが安住して特権性を置く場はない。記号の過剰は、意味の所在を定義する知の生産が、むしろきわめて局所的な場にすぎないことを相対的に明らかにしてしまうからである。ここで言う生産とは知的なそれというよりはむしろ、場所の記憶や経験を抹消し、ガジェットのような記号を散開させながら不安げに移ろいゆくモードの論理

に相即していると言えよう。

しかし、これらは記号である以上、ふとした契機によって偶然の「出会い」による復活を遂げる可能性が無いとは言えない。ボードリヤールは『象徴交換と死』の結末で、詩的言語やアナグラムといった意味の破壊の論理に対し、現代的な象徴交換の再生を予見していた⁴⁸⁾。未開社会に倣って記号の消尽的破壊を企図するボードリヤールは、死者を復活させるシャーマンよろしく、瓦礫のように廃棄される山のような記号とたわむれているのである。このような態度はいわゆる「ポストモダン」的なファッションブルさには回収されえない、膨大な死がうごめく不気味な記号の体系の中にある。

このような形で、ボードリヤールのいうく生権力論は安易な生命倫理的問題に回収されることを避けながら、あらゆる「死者」の問題へと総合化され、収斂していく。このような意味では、彼の名がく生権力論の正史から漏れ出していることは、ある意味で当然の帰結でもある。いっぽう、フーコー亡き後、生前の彼が予期していなかったであろう医療・統治技術の驚異的な発展と、より直截的に「生命」を準拠項として介入する医学-生物学的権力の顕在化という動かし得ぬ事態があり、それに伴ってフーコーの提起を批判的に乗り越え、より現代的文脈に即して敷衍した形でのいくつかの生権力論の進展がみられることは見落とせない⁴⁹⁾。このような思想的進展をみた現在から振り返ると、ボードリヤールの生権力論はフーコーと同世代かその少し後の、いささか予言じみた黙示を含んだ素描を超え出でていないようにも見える。

しかしながら、これらの議論においてなお、超越者としての「死者」をどう扱うのかという課題は依然として残存している。フーコーが論じ落とした死者の問題について語るボードリヤールは、むしろそれを媒介として、社会をある全体性として捉えるときに前提せざるを得ない、ある種の空虚な消失点に関して論じていた（そこに主体を描くことを強く回避する点ではフーコーと問題設定を一にするものである）。ボードリヤールの生権力論とは、生権力の〈外部〉、すなわち社会を肯定的に成立させている蝶番のような「呪われた部分」へ経由することで、むしろフーコー的生権力システムを、まさにその裏側から照射しようとする「ネガ生権力論」であると言えることができる⁵⁰⁾。ここで強調しておく必要があるが、こ

の論理における死者とはあくまでわれわれの認識を超えたところにある存在であり、理解も追悼も可能ではあり得ないがゆえに、ファシズムに代表される〈死者の政治化〉とは一線を画するものである点に留意する必要がある。われわれに残されているのは、彼らに対して、その象徴性をそのままに、主体の思い上がりを排してひたすらその位置を探る道でしかない。このような方法論は、まさに社会における〈外部〉としての死者が要求したものであり、一貫して宙吊りにされた死について語るボードリヤールの言述は、われわれに対して死者と交流しともにあることの、ひとつの倫理を要求しているようである。

注

- 1) M.Foucault, *La volonté de savoir*, Gallimard, 1976, p. 184.
- 2) この点に関しては、本稿の問題射程を超えうものであるため素描的な説明をするにとどめるが、この詳細な理論展開は、大澤真幸の論述に詳しい。(『主体性の転位(上): フーコーの向こう側』『思想』846 1994, pp. 36-50.)
- 3) たとえば、M・フーコー、渡邊守章『哲学の舞台』朝日新聞出版, 1978, p.165. また、『知への意思』第5章のタイトルはまさに「死に対する権利と生に対する権利」である。フーコーの議論は、知や文化の外部にあるものとしての権力観を大きく転換させたものであり、またその言述そのものがわれわれが権力の対象にとどまらずその積極的に再生産する主体でもあるという、言いようのない不快感を体現しているにしても、自死をもって生権力への「抵抗」を口走るその無自覚さが、権力との間に致命的な共犯性を結ぶ可能性を拭い去れない。この点に関する批判は、市野川容孝によって鋭く展開されている(『生-権力論批判』『現代思想』21(12), 1993.)。
- 4) 内田隆三「資本主義と権力のエピステーメー」『思想』846, 1994, pp.24-5.
- 5) かつて構造主義は、〈主体〉に対する先験性を解除し、記号論的知によって〈主体〉を透過し、横断する無意識の原理を析出することを試みた。フーコーは記号論の流行からある距離をおいていたように見えるにしろ、その主体の特権性を強く戒める態度は、構造主義と問題の位相を一にするものである。
- 6) 内田隆三「消費社会におけるシーニュと論理」『社会学評論』32(4), 1982, p.3.
- 7) N・ルーマンのシステム論的課題と重なりあう問題系である。
- 8) これは宗教や倫理や国家といった固有の領域がシステムによって代補され、一般的等価物の集合として再編される帰結としてあるものである。
- 9) なお、ボードリヤールに関しての先行研究は水原俊博による博士論文(『ボードリヤールの消費社会理論と80年代日本社会』立教大学社会学研究科, 2005年.)において詳細にまとめられている。しかしながら、このコーパスを参照しても分かるように、ボードリヤールへの言及はこれまで、とりわけ英米圏において、シミュレーション社会や電子メディア論などの「ポストモダン社会論」として読解される傾向にあったことが強く窺える。本稿はむしろ、ボードリヤールの理論とフランス社会学史との連続性を重視し、またその主体性の問題に照準することで、その社会思想史的位相を愚直な限り問うものである。
- 10) むろん、この用法には言語記号を象徴と定義する一般言語学に対する批判が込められているとみるべきである。
- 11) なお、これからの議論では、「生」権力論とはいえども、「死」の側のほうが論題の中心になることをご容赦きたい。なぜなら、ボードリヤールの意図はむしろ、死の側に照準することによってこそ、権力が作動する装置の辺縁から、近代社会を相対化することにあるからである。
- 12) フーコーは、新たな権力下での殺戮について「他者にとって一種の生物学的危険であるような人間だからこそ、合法的に殺し得るのである。」(フーコー前掲書邦訳, p.175) と述べ、さまざまな異常者たちが、免疫的に排除されるべき「敵」として生物学的な表象をもつ点を、システムの合理性に即して理解している。
- 13) ESM, p.277
- 14) 「象徴界のもつラディカルさは、それを中性化しようと苦心するあらゆる科学や学問が、そのお返しに、かえって分析され、理解不能なものを送り返されてしまうという意味でラディカルなのである。」(ESM, p.299) と述べられるように、ボードリヤールは一貫して象徴(界)について語るが、それは決してわれわれがその理解や把握の届き得ないエニグマとしてある。
- 15) G.Bataille, *La littérature et la Mal*, Gallimard, 1957, 序.
- 16) J.Baudrillard, *L'échange symbolique et la mort*, Gal-

- limard, 1976 (以下ESMと略記), p.7.
- 17) この引用部付近においては、『知への意思』の論旨に対するかなり踏み込んだ註解と批判が試みられている。本書が『知への意思』の出版とほぼ同時期であることを考えれば、フーコーの知的反響を受けて、ボードリヤールがその批判的乗り越えを意図していたことは明らかである。
 - 18) ESM, p.195
 - 19) G.Gorer, *Death, grief and mourning in contemporary Britain*, Cresset Press, 1965.
 - 20) P.Ariès, *Essais sur l'histoire de la mort en Occident: Du moyen age à nos jours*, Seuil, 1975, p.205.
 - 21) 澤井敦, 「死のタブー化」再考『社会学評論』53(1), 1996, pp.118-34.
 - 22) Baudrillard, *La transparence du mal*, Galilée, 1990, p. 88.
 - 23) J・ボードリヤール「トランスポリティック——消滅の様式」『シミュレーションの時代』, 竹原あき子他訳, JICC出版局, 1982, p.49.
 - 24) この権力論の対比は、内田隆三による理論的成果(『消費社会と権力』岩波書店, 1987. 第3章第1部)に多くを負っている。なお、内田も引用しているファシズムの例示における「メランコリー」と「喪」は、それと明示されてないが明らかにフロイトに依るものであり(「喪とメランコリー」)、ボードリヤールの見解は喪(=蕩尽)の不可能性に基づく不安に取り憑かれた主体形成の理論としてのフロイトの社会理論的応用を示唆するものである。この点において彼の理論はJ・バトラーのそれと結びつくことが可能である(*The psychic life of power: Theories in subjection*, Stanford U.P., 1997, 第5・6章)。
 - 25) C・レヴィ=ストロースの構造分析を「象徴界についてのもっとも墮落した理解」とする批判において顕著である。(ESM, p.206註)
 - 26) ボードリヤールはJ・ラカンやC・レヴィ=ストロースらの見解を批判しつつ、「象徴界とは、ある概念でも、審級あるいはカテゴリーでも「構造」でもなくて、交換の行為であり、現実的なものを終わらせ、現実的なものを解消し、同時に現実界と想像界との対立をも解消するひとつの社会的関係である」と定義しなおす(ESM, p. 204)。それは、社会的存在としてのわれわれが、実存や本質とは無関係に記号同士が相互に指示しあう、ある象徴体系の内部にいる(ホモ・シンボリクス)ことに根差している。
 - 27) ESM, p.73註.
 - 28) この点に関し、70年代以後一貫して公開講義を持ちその理論の基礎となった事実について語る場をもっていたフーコーと対照的に、ボードリヤールがその理論的基礎とした社会的事実について我々に与えられる情報は際立って少ない(このことが彼の理論的評価と輸入を低いままにしてもいる)。今後、未公刊の講義録やノートを含めたこの側面への接近は、ボードリヤール研究にとどまらない重要な理論社会学的課題である。
 - 29) たとえば、超越者からの贈与を擬装する、規範性と事実命題を欠いた母性=誘惑的な広告の論理は、その代表的なものである。
 - 30) ESM, p.221.
 - 31) *Oublier Foucault*, Galilée, 1977. ボードリヤールのフーコー批判は、自身が「これは反論ではない」と断っている通り、フーコーの成果を慎重に踏まえながらその問題系を先にすすめたものである。
 - 32) たとえば、1977年の渡邊守章との対談(「権力と知」『フーコー・コレクション4 権力・監禁』pp.405-36, 2006.)を見よ。同様の言説は、80年代にかけてフーコディアンによって広く影響力を持ったものである。
 - 33) M.Foucault, *Surveiller et Punir*, Galilée, 1975. 序.
 - 34) Baudrillard前掲書邦訳, p.35(塚原史訳『誘惑論序説: フーコーを忘れよう』国文社)。
 - 35) ESM, p.196.
 - 36) A・ネグリであれば「資本主義的生産関係の支配」というだろうが、われわれの交換行為の内側から湧き出されるこの力に、一はやくボードリヤールが着目していた点は強調されてよい。まさに工場について彼が述べたことと同様のことがネグリの文章に散見されることを惹起しよう。(A・ネグリ, M・ハート『ディオニュソスの労働: 国家形態批判』長原豊・崎山政毅訳, 人文書院, 2008, pp.25-6.)
 - 37) この意味では一般的理論の側に軸足を置いている点で、あくまで言説にこだわるフーコーと対照的である。しかしながら、ボードリヤール自身、システムという言葉を極めて曖昧にしか使用しておらず、理論的定式化に乏しい部分が否めない。これは(ルーマンとは対照的に)システムの先験的な前提を排する意図もあるが、より本質的には、モードに即してその都度内部のコードを分節化し、再編成させていくような刹那的な消費の言語を産出することで、体系性を喪失したまま、不安定に増殖するに至ったシステム、それはもはやシステムとは言えないからである。

- 38) 大澤真幸「主体性の転位 (中)」『思想』848, 1995, pp. 88-108.
- 39) ESM, p.200.
- 40) 「生-権力が前提としているのは、人間が可死的であるということ、配慮を怠ればいつでも死に至るという潜在的可能性である。」(市野川前掲論文)と述べられるとおり、近代的な生権力は生のみならず、死をその駆動的始点とし、それを単一のシステムに回収することをその本質的特徴としている。この意味では、〈生権力〉を〈死権力〉と呼んだところであまり変わりはない。
- 41) *ibid.* p.224.
- 42) *ibid.* p.225.
- 43) ボードリヤールによれば、たとえば精神分析における無意識も、過去の記号＝トラウマが潜在的に堆積したものともみられる。(ibid, p.226)
- 44) *ibid.* p.224.
- 45) *ibid.* p.196.
- 46) たとえば、ボードリヤールは既に『象徴交換と死』の一節でWTCを論じて不吉な暗示をしているが (ESM, pp.108-9)、これは、摩天楼が互いに「競争」するのではなく、互いが互いを見詰め合い、意味の純粋なたわむれを起こしている点に着目しての言及であった。システムがその指示対象の持つ具体性を離陸し、自己準拠的な体系の膨張と増殖を繰り返すものだとすれば、周期的なカタストロフがその常数として組み込まれている可能性がある。この主題は、『透明な悪』などの90年代以後の著作へと帰結されることになる。
- 47) Baudrillard, *La société de consommation*, Gallimard, 1970, p.56.
- 48) ESM, 第6章.
- 49) とりわけ、G・アガンベン、J・バトラー、N・ローズの三者はフーコー的生権力を敷衍しつつ、それを乗り越えた形、すなわち必ずしも〈主体〉に依拠しない形で現代的な社会理論への大胆な接続を図っている点で、見逃せない論者である。
- 50) これに関して、フーコーの1976年の講義「社会は防衛しなければならない」の最終講義にて呈示される「原子力的権力」の概念は、「生きさせる権力」と「殺す権力」の相互交錯という一歩進んだ議論が示唆されており、しかもこの権力は生の無条件の肯定により出現する癌細胞のようなものである点で、その後のボードリヤールの議論に接続することが可能である。(Il faut défendre la société, Seuil, 1993.)

